
大いなる

Y.Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大いなる

【Nコード】

N6354C

【作者名】

Y・Y

【あらすじ】

ある雨降る日に逃げ出した少年と、教会で祈りを捧げる少女が出逢う時。秘められた黙示録が開かれる。

黙示録序章 イン트로ダクション

ハッ・・・ハッ・・・ハッ・・・

土砂降りの雨

一人の白い髪的少年が 無我夢中で走っていた。

ハッ・・・ハッ・・・ハッ・・・

「!・・・おい!!>大いなる<が逃げたぞ!!」

「何だと・・・!??っ探し出せ、早く!!」

ハッ・・・ハッ・・・ハッ・・・

「ダメです、中にはどこにもいません!!」

「外に逃げたな!??」

ハッ・・・ハッ・・・ハッ・・・

「・・・っ!!陛下に連絡を!!国から奴が出られぬように!!」

ハッ・・ハッ・・、
・・・・・

息が切れて 少年は一度立ち止まり 後ろを振り返った。
そこにあったのは・・・

暗く壁を光らせる 大きな収容所だった。

黙示録第一章 教会・礼拝堂にて

ピチュ、ピチュ・・・ピチュ

静かな、穏やかな風景。

外では涼やかな小鳥の声が聞こえる。

冷えた空気を感じながら、金髪の修道服の少女――クリーフィは祭壇で祈りを捧げていた。

「っ・・・」

ステンドグラスの窓が作る光の彩りに、耐え切れず目を開ける。ゆっくりと開かれたその先には、神々しく光に包まれる、窓を中心にそれぞれ横に立つ石像の姿が見えるのである。

そして一步、祭壇から離れると、彼女は雄雄しいその姿に、自然と跪いた。

大天使とされる、火を司るミカエル。風を司るラファエル。

それを信仰し、崇め、その代わりに加護を受ける【アーク教】は、二大宗教と呼ばれる程の大きな宗教だ。

クリーフィも、【アーク教】の信者の一人である。

「？、騒がしい・・・何かあったのかしら。」

先ほどから聞こえる、ドタバタとした足音が多い。

気分を害され、彼女は思わず少し眉をひそめた。

「あ、クリーフィ！此処にいたのね。」

小走りで入り口へと駆け寄って来たのは、同じ信者のロナだ。黒

髪が光を反射する。

「・・・何かあったの？」

朝からここにいたので、外の事も気にせずやっていたせいで、事態がまだよくわかっていないクリーフィに対して、何かって・・・と呆れ顔のロナ。

「国のお偉いさんから令書が届いたのよ！本堂の方よ、急いで！」

「・・・ふむ、全員、揃ったようだな。」

ネルフ神父が、大きな祭壇から、修道士達を見回した。

先ほどクリーフィがいたのは、別の比較的小さな礼拝堂で、こちららは本堂と呼ばれる。

「先ほど、国王陛下からの令書が、このエルシュの教会に届いた。」

国王陛下、という言葉に、皆が一斉に騒がしくなる。

国王からのじきじきな、というのは、珍しい事態であり、由々しき事態を指す。

「嗚呼、静まって、静まって・・・うむ。それで、この令書には、こう書かれてある。」

神父の言葉に、誰もが静まり、耳を澄ました。

「・・・『銀髪の少年を発見次第、即座に国へと引き渡すように』・・・」

「?・・・少、年？」

事態に対してずいぶんとあっけらかんとした内容に、またザワザワとどよめきが走る。

「保護の間違いじゃなくて・・・国に引き渡すの？」
ロナがおずおずと呟く。

「ならその子、罪人なのかしら・・・」

クリーフィがロナの言葉に相槌をうちながら、静かに答えた。

「・・・聞こえたかな、皆^{みな}。では、昼食にしようかね。さあさあ、食堂に行きましょうか。」

神父が、場をまとめるために軽く手を叩きながら、高らかにそう言った。

黙示録第二章 『声』

大きな造りの、光をよく取り込みやすくなっている食堂。
昼食の席は、令書の内容のことがすぐさま取り上げられた。

「やっぱり、罪人なのかなあ。その子。」

隣のロナが、玉子焼きが刺さったフォークを銜^{くわ}えながら言った。
こちらの修道士の食事は、魚以外の肉は禁止されている。

「国王陛下がじきじきに、でしょう？ 無難なのはそのくらいよ。」

あと、食べてから言いなさい。フォーク銜えながら喋るの、行儀悪いわよ。

クリーフィが白パンを一つちぎる。

「案外、そうでもないかもよ・・・」

「「！」」

いきなり後ろから聞こえてきた声に驚いて、クリーフィがちぎった物を落としそうになり、ロナは食べていた玉子焼きが喉につかえた。

「驚かせないでよ・・・フェテス。」

クリーフィはむせかえるロナの背中をさすりながら、疲れた声で後ろを向く。

そこにいたのは、灰色の髪がちらりと出た、かなり大人びた少女。
ごめんなさいね、とフェテスは軽く頭を下げた。

「隣、いい？」

「ええ。」

「ありがとう。」

テンションが低い彼女達の会話は簡素だ。ロナはそう思った。

「・・・で、そうでもないって何が？」

やっとなつかえが取れたロナが、フェテスに聞く。

「うん・・・隠し子とか、国が秘密にしている人物だとか。」

「・・・最初はともかく。その線もあるけど・・・もうやめましよこの話は。」

首を振ってため息をつきながらクリーフィが二人に言う。

「えゝ何でゝ？面白そうじゃん。」

ロナが頬を膨らませて怒る、というか駄々をこねる。

「実際見つけなきゃ意味ないでしょう？無駄に時間が――――」
ロナを一蹴したその時。

クリーフィが、その場で硬直した。

そして瞬間、いきなり頭の中で『声』が――

《汝 大天使に仕えし者よ》

「・・・クリーフィ？」

《地下に眠る 迷えし子を 救えよ》

「・・・ちよつとゝ？・・・クリーフィゝ？」

《さすれば 汝――――》

「クリーフィ！」

「！」

ロナの声に、クリーフィはハッと顔を上げた。

見れば、目の前にロナの顔が、心配そうにこちらを見ている。

「・・・ちよっと大丈夫？ 朝の祈りで寝不足なのなら、寝てきてもいいのよ？」

深刻そうな声音でロナが話しかけてくる。

それに答えるか、のようにクリーフィの目が伏せがちにされた。

だが今は、頭が霧がかかったようにボンヤリしていて、ロナの声が酷く聞き取りづらい・・・。

魂が抜けたように、何も考えられなくなっていて、意識も少し朦朧もうろうとしている。

貧血になったようなクリーフィを、真剣な表情で見つめていたフェテスは

「ロナ、ちよっといいかしら。」

「え？ あ、うん。」

不意にロナを下がらせた。

そうすると、戸惑うロナを横目に、後ろから、虚ろな表情になっているクリーフィの肩を持って同じ目線になり。

静かに彼女の頭の後ろで、

「大丈夫？」

そう、囁いた。

するとクリーフィが驚いたように息をのみ、目を見開き、表情がハッキリしたものになる。

それを見て、安心そうにフェテスが再度

「大丈夫？」

と声をかけた。

だがクリーフィは先ほどの表情のまま

「――」

・・・今何かを呟いたように唇が動いた。

それに気付いたフェテスが、眉をひそめた。

と同時に。

「……っ行かなくちゃ……！」

苦しそうにそう言い残し。

クリーフィは勢いよく立ち上がり、走り去って行った。

「っクリーフィ!？」

ロナはそれを見て、クリーフィを追おうとした。
が。

それはフェテスの腕がスツと伸び、前へ出ようとしたロナを押し留めた。

フェテスは深刻そうな表情のまま、クリーフィが走っていった方向を見ていた。

黙示録第三章 奔走、地下へ

フェテスの手を振り切り、クリーフィは走り出した。頭の中では、まだあの『声』が反響している。

探さなくては。

今の彼女は、その気持ちでいっぱいになり、立ち止まる時間すらも惜しくて、ただひたすら『地下』を目指して走り続けた。

この教会にある『地下』は、最下層に位置する墓標置き場だ。

クリーフィはもうそこだと決め付けて走っていた。

考える時間すらも惜しい。

だが曲がる時に壁にぶつかりそうになり、走ってる最中に人にぶつかりそうになり、

嗚呼、もう！と悪態をつきながらも、人に軽く謝りを入れて、また走りだす。

それを何回か繰り返し、ようやく彼女は最下層の入り口の階段を駆け下りていった。

そうして、長い階段を最後まで駆け下りることが出来たのは、息がもう切れ切れで、肺が今までにない痛さで悲鳴をあげ、心臓が苦しいほどに高鳴っている状態の今この時だった。

運動が得意な方ではないクリーフィは、ほとんど足に力が入らなくて、階段の前の壁にへたりこんでいた。

とにかく酸素が足りない。目の前が先ほどの時よりもくらくらする。そして足が酷く痛む。明日はもう立てないかもしれない。

だが、ここまで来た以上、もう引き返す事は出来ない。
クリーフィは握り締めすぎて力の入らない手で、
なんとか足元の燭台しよくだいを引き寄せ、蠟燭ろうそくに火を灯した。
ポウ、と温かな光が優しく足元を照らすのを見て、
クリーフィは意を決して、再び立ち上がった。

黙示録第四章 先にあるのは

薄暗い空間に、足音だけが響く。

蠟燭ろうそくの光に照らされて、闇の中からたくさんの墓標が浮かび上がる光景は、

この上なく不気味で、だがそれでいて・・・取り込まれそうな感覚がある。

クリーフィは歩みを止めながら、軽く掲げている燭台しよくだいを、時折あたりに向けた。

この部屋は元々、教会内で死者を埋葬するために出来たのだが、今ではそのような依頼は少なくなり、結局墓標だけが取り残される形となった。

もう先ほどのような焦燥感はない。

ここにきて妙に落ち着いた心で、クリーフィは前方に位置する、最も大きな大十字架のあるはずの場所、を見上げた。

あと見ていないのは、ここだけ・・・。

ほぼ全ての墓標の群れを見てまわり、最後に残った場所だ。

クリーフィは、あくまでもゆっくりと、そこへと歩み寄った。小さな段差を、上る。

「・・・？」

今、足の先に、何かが当たったような感覚が・・・。

確かな確信が、足から伝わってきたのを感じて。

そしてクリーフィは、大十字架へと蝋燭ろうそくの灯りを向けた――

「！」

驚きの表情を浮かべた後、思わずクリーフィは上りかけた段差を急いで降りた。

蝋燭ろうそくの灯りを再び向ける。

そこにいたのは・・・少年、だった。

年はクリーフィとほぼ同じか、ひとつ下くらいの少年が、大十字架の小さな段差の上に、もたれかかるようにして倒れていた。そして灯りに照らされたその少年の髪の色は。

「白い髪かみの、少年・・・！」

「っう・・・」

ほのかな明るさに気が付いたのか、少年は小さな声を出したと思うと、

虚ろにも見てとれるとろんとした瞳で、ふとこちらを見た。

（神よ・・・貴方は私に・・・）

（何をさせようと・・・？）

「アナタは・・・？」

少年の問いかけに、クリーフィは戸惑ったように相手を見た。何と言おうか迷っていたが、少ししてから、こう切り出した。

「・・・私の名は、クリーフィ。貴方の名は・・・？」

「僕の・・・名・・・。」

クリーフィの言葉に、考えるように目を伏せた少年は、少したつと顔を上げて「・・・いなる」と、何かを呟いた。

「っえ・・・？」

クリーフィは目を開けて、もう一回聞こうとかがんで同じ目線になる。

すると少年は、今度はしっかりとした声で言った。

「【大いなる】・・・」

黙示録第五章　ちょっとした挑戦

「ねえ、ホントに大丈夫？　さっきからおかしいわよ！」
戻ってきたクリーフィに、ロナが心配そうに詰め寄ってくる。

「だから大丈夫って何回言わせたか気が済むのよ。」

それにクリーフィが、何事もなかったかのような口調で跳ね返した。
これで三回目くらいだろうか。

そんな応対にロナが「もう！」と頬を膨らませて怒った。

「何よ、顔色変えてどっかに行っちゃったと思ったら、戻ってきて
もコレだし・・・」

フェテスが止めさえしなければ、と、後ろで見守ってた本人をその
表情で見た。

「ちょっと急用だったみたいだから、一人の方が楽だと思って。ね、
そうなんでしょう？」

おしとやかな口調でそう言い、穏やかな笑顔でこちらを見つめるフ
エテスに、内心ドキリとしながらも「まあね・・・」と何とか落ち着
いた口調で返した。

・・・どうも自分はこのヒトが苦手だ。

美しい笑顔の後の、すうっと細く開かれる眼が、こちらを探ってい
るように感じる。

「じゃあ、そろそろ行きましようか。夕食の時間が近いから。」

するとまた先ほどの笑顔で優しそうにそう言って、フェテスはさっ
さと機敏な動きで歩き出した。

ロナもうなずいて後に続く。

「ほらクリーフィ！　来ないと置いてくよ！」

「・・・ええ、今行くわ。」

当のクリーフィは、ホッとした感情と、あの少年――【大いなる】
のことが渦巻いていた。

「大いなる・・・？」

少年の言葉を、そのままオウム返しに、クリーフィは呟いた。それに答えるように、【大いなる】がこくりと頷いた。

《地下に眠る 迷えし子を 救えよ》

あの時間こえた『声』は、確かにそう言っていた。

つまり自分が、この【大いなる】という少年を救えと言うのだろう。

（大天使様の巡り合わせ・・・）

もしそれが、本当にあるのなら。

この出逢いが、それならば。

《さすれば 汝————》

あの言葉の続きがどうであれ。

貫き通すべきだろう。

自分は。

クリーフィが考えている間、【大いなる】はそれを、ただ黙っていた。

どちらも話を切り出さないせいで、一枚の絵になったような沈黙が包んでいた。

「・・・行かなくても、良いのですか？」

「っえ？」

不意に【大いなる】が口を開いた。

それにクリーフィは思わず声を上げ、慌てて自分の口を塞ぐ。

それに少し間を置いて、クリーフィが手を離れたのを見て、言う。

「アナタの近い人が、待っている・・・」

そういつて【大いなる】は、かすかに笑った。

「あ・・・！」

そういえば、すっかり忘れていた。

クリーフィはロナとフェテスの事を思い出して、途端に焦りが湧き出した。

あのまま走り出して、そのままなのだ。

きつと何かしら疑っているに違いない。

ロナはまだごまかせるから良いとして、フェテスは自分より一つ上だから見当もつかない。

「行った方が良い。僕は、大丈夫・・・」

【大いなる】は呟くような声で、階段を指し示した。

「・・・ごめんなさい、また来るわ。」

ここは彼の言葉に甘えた方がいい。

そう思い、クリーフィは駆け足で、墓標置き場を後にした。

そして現在に至る。

さて―――。

クリーフィは夕食の席で、どうやって彼を逃がそうかと考えていた。

「・・・そういえば」

彼女はふと、あることに気がついた。

――私は、あの『地下』への

墓標置き場への道を、知らなかったのだ――

クリーフィがこのアーク教の修道士になったのは、たった一年前のこと。

自分より長く神に仕えている、他の修道士達に『昔話』だと聞いていた、それだけだ。

それだけだというのに、何故。

「これも、神の意志だと・・・？」

クリーフィは無意識か、ぽつりと口から呟きを零し、

「何か悩みでもあるの？」

「ひゃっ!？」

ずい、と唐突に現れた顔に、思わず悲鳴を上げてしまった。

「・・・驚くことないじゃない」

「ご、ごめんなさい・・・」

そこにいたのは、眉をひそめているロナだった。

「頑張りすぎよ。きつと疲れてるんだわ。・・・あなた熱心すぎなのよ」

どうやら先ほどの眩きから、ロナは勘違いをしてくれたようだ。

クリーフィは安堵した後、そして次の彼女の言葉に引っかかりを覚えた。

「ここは空き部屋ならいくらでもあるし――」

――空き部屋？

「ちょっとぐらいなら気づかれないこともないんだから」「ねえロナ」

「・・・何？」

「そういえばここ、昔使われていた部屋とかが、そのまま残っているのよね？」

「え、ええそうよ・・・確か昔の悪習を封じるためとかで、今じゃ立ち入り禁止になっている場所がかなりあるって・・・」

聞いたことがあるわ。ロナはおずおずとそう言った。

「じゃあロナ。一つ、私から提案があるんだけど」

「な・・・今度は何よ」

「ちょっとした探検、なんてどう？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6354c/>

大いなる

2010年10月10日20時33分発行